

文福茶がま

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、上野国館林に、茂林寺というお寺がありました。このお寺の和尚さんはたいそうお茶の湯がすきで、いろいろとかわったお茶道具を集めてまいにち、それをいじつては楽しみにしていました。

ある日和尚さんは用事があつて町へ行つた歸りに、一軒の道具屋で、氣に入つた形の茶がまを見つけました。和尚さんはさつそくそれを買つて歸つて、自分のお部屋に飾つて、

「どうです、なかなかいい茶がまでしょう。」

と、来る人ごとに見せて、じまんしていました。

ある晩和尚さんはいつものとおりお居間に茶がまを飾つたまま、そのそばでうとうと居眠りをしていました。そのうちほんとうにぐつすり、寝込んでしまいました。

和尚さんのお部屋があんまり静かなので、小僧さんたちは、どうしたのかと思つて、そつと障子の透き間から中をのぞいてみました。すると和尚さんのそばに布団をしい

て座^{すわ}つていた茶^{ちゃ}がまが、ひとりでにむくむくと動き出^{うご}しました。「おや。」と思^{おも}ううちに、茶^{ちゃ}がまからひよつこり頭^{あたま}が出て、太^{ふと}いしつぽがはえて、四^{ほん}本の足^{あし}が出て、やがてのそのそとお部屋^{へや}の中^{なか}を歩^{ある}き出^だしました。

小僧^{こぞう}さんたちはびつくりして、お部屋^{へや}の中^{なか}へとび込^こんで来^きて、

「やあ、たいへんだ。茶^{ちゃ}がまが化^ばけた。」

「和尚^{おしょう}さん、和尚^{おしょう}さん。茶^{ちゃ}がまが歩^{ある}き出^だしましたよ。」

と、てんでんにとんきような声^{こえ}を立て^たててさわぎ出^だしました。その音^{おと}に和尚^{おしょう}さんは目^めをさまして、

「やかましい、何^{なに}をさわぐのだ。」

と目をこすりながらしかりました。

「でも和尚^{おしょう}さん、ごらんなさい。ほら、あのとお^{ちや}り茶^あがまが歩^{ある}きますよ。」

こうてんでんに言^いうので、和尚^{おしょう}さんも小僧^{こぞう}さんたちの指^{ゆび}さす方^{ほう}を見^みますと、茶^{ちゃ}がまに頭^{あたま}も足^{あし}もしつぽありません。ちゃんともとの茶^{ちや}がまになつて、いつの間^まにか布団^{ふとん}の上^{うへ}にのつて、すましていました。和尚^{おしょう}さんはおこつて、

「何^{なん}だ。ばかなことを言^いうにもほどがある。」

「でもへんだなあ。たしかに歩いていたのに。」

こう言いながら小僧さんたちはふしぎそうに、寄つて来て茶がまをたたいてみました。茶がまは「かん。」と鳴りました。

「それみろ。やつぱりただの茶がまだ。くだらないことをいって、せつかくいい心持ちに寝ているところを起こしてしまった。」

和尚さんにひどくしかられて、小僧さんたちはしよげて、ぶつぶつ口ごごとを言いながら引つ込んでいきました。

そのあくる日和尚さんは、

「せつかく茶がまを買つて来て、ながめてばかりいてもつまらない。今日はひとつ使いだめしをしてやろう。」

と言つて、茶がまに水をくみ入れました。すると小さな茶がまのくせに、いきなり手おけに一ぱいの水をがぶりと飲んでしまいました。

和尚さんは少し「へんだ。」と思いましたが、ほかに変わったこともないので、安心してまた水を入れて、いろりにかけました。すると、しばらくしてお尻があたたまつてくると、茶がまはだしぬけに、「あつい。」と言つて、いろりの外へとび出しました。

おやと思う間にたぬきの頭が出て、四本の足が出て、太いしつぽがはえて、のこのことおざしきの中を歩き出しましたから、和尚さんは、「わあッ。」と言つて、思わずとび上がりしました。

「たいへん、たいへん。茶がまが化けた。だれか来てくれ。」

和尚さんがびつくりして大きな声で呼び立てますと、小僧さんたちは、

「そら来た。」

というので、向こう鉢巻きで、ほうきやはたきを持ってとび込んで来ました。でももうその時分にはもとの茶がまになって、布団の上にすましていました。たたけばまた「かん。かん。」と鳴りました。

和尚さんはまだびつくりしたような顔をしながら、

「どうもいい茶がまを手に入れたと思つたら、とんだものをしよい込んだ。どうしたものだろう。」

と考えていますと、門の外で、

「くずい、くずい。」

という声がしました。

「ああ、いいところへくず屋が来た。こんな茶がまはいっそくず屋に売ってしまおう。」
和尚さんはこう言つて、さっそくくず屋を呼ばせました。

くず屋は和尚さんの出した茶がまを手にとつて、なでてみたり、たたいてみたり、底をかえしてみたりしたあとで、

「これはけっこうな品物です。」

と言つて、茶がまを買つて、くずかごの中に入れて持つて行きました。

二

茶がまを買つたくず屋は、うちへ帰つてもまだにこにこして、

「これはこのごろにない掘り出しものだ。どうかして道具ずきなお金持ちをつかまえて、いい価に売らなければならない。」

こう独り言を言いながら、その晩はだいじそうに茶がまをまくら元に飾つて、ぐつすり寝ました。すると真夜中すぎになつて、どこかで、

「もしもしくず屋さん、くず屋さん。」

と呼ぶ声がしました。はつとして目をさましますと、まくら元にさっきの茶がまがいつの間にか毛むくじやらかな頭と太いしつぽを出して、ちよこなんと座っていました。くず屋はびつくりして、はね起きました。

「やあ、たいへん。茶がまが化けたぞ。」

「くず屋さん、そんなにおどろかないでもいいよ。」

「だつておどろかずにいられるものかい。茶がまに毛がはえて歩き出せば、だれだつておどろくだろうじゃないか。いったいお前は何だい。」

「わたしは文福茶がまといつて、ほんとうはたぬきの化けた茶がまですよ。じつはある日野原へ出て遊んでいるところを五、六人の男に追いまわされて、しかたなしに茶がまに化けて草のところにがつていると、またその男たちが見つけて、こんどは茶がまだ、茶がまだ、いいものが手に入った。これをどこかへ売りとばして、みんなどうまいものを買つて食べようと言いました。それでわたしは古道具屋に売られて、店先にさらされて、さんざん窮屈な目にありました。その上何も食べさせてくれないので、おなかがすいて死にそうになったところを、お寺の和尚さんに買われて行きました。お寺では、やつと手おけに一ぱいの水をもらつて、一口にがぶ飲みしてほつと息をついたところを、いき

なりいろりにのせられて、お尻しりから火あぶりにされたのにはさすがにおどろきました。もうもうあんな所ところはこりこりです。あなたは人のいい、しんせつな方かたらしいから、どうぞしばらくわたしをうちに置いて養やしなつて下さいませんか。きつとお礼れいはしますから。」

「うん、うん、置いてやるぐらいわけのないことだ。だがお礼れいをするってどんなことをするつもりだい。」

「へえ。見世物みせものでいろいろおもしろい芸当げいとうをして見せて、あなたにたんとお金かねもうけをさせてあげますよ。」

「ふん、芸当げいとうっていったいどんなことをするのだい。」

「さあ、さし当あたり綱渡りつなわたの軽かるわざに、文福茶ぶんぷちやがまの浮うかれ踊りおどりをやりましょう。もうくず屋やなんかやめてしまつて、見世物師みせものしにおんななさい。あしたからたんとお金かねがもうかりますよ。」

こう言いわれてくず屋やはすっかり乗のり気きになつてしまいました。そして茶ちやがまのすすめるとおりくず屋やをやめてしまいました。

そのあくる日夜よが明あけると、くず屋やはさつそく見世物みせもののしたくにかかりました。まず町まちの盛り場さかばに一軒見世物小屋けんみせものこやをこしらえて、文福茶ぶんぷちやがまの綱渡りつなわたと浮うかれ踊りおどりの絵えをか

いた大看板おおかんばんを上げ、太夫元たゆうもとと木戸番きどばんと口上こうじょう言いいを自分一人じぶんひとりで兼ねかねました。そして木戸口きどぐちに座すわって大きな声こえで、

「さあ、さあ、大評判おおひょうばんの文福茶ぶんぷくちやがまに毛けが生はえて、手足てあしが生はえて、綱渡りつなわたの軽かるわざから、浮うかれ踊りおどのふしぎな芸当げいとう、評判ひょうばんじや、評判ひょうばんじや。」

と呼び立よびたてました。

往来おうらいの人たちは、ふしぎな看板かんばんとおもしろそうな口上こうじょうに釣つられて、ぞろぞろ見み世物せもの小屋こやへ詰めつかけて来きて、たちまち、まんいんになつてしまいました。

やがて拍子木ひょうしぎが鳴なって、幕まくが上がりありますと、文福茶ぶんぷくちやがまが、のこのこ楽屋がくやから出でて

来きて、お目見めみえのごあいさつをしました。見みるとそれは思おもいもつかない、大きな茶ちやがまに手足てあしの生はえた化け物ばものでしたから、見物けんぶつはみんな「あつ。」と言いって目をまるくしました。

それだけでもふしぎなのに、その茶ちやがまの化け物ばものが両方りやうほうの手に唐傘からかさをさして扇おうぎを開ひらいて、綱つなの上に両足りやうあしをかけました。そして重おもい体を器用きように調子ちようしをとりながら、綱つな渡りなわたの一曲きよくを首尾しゆびよくやつてのけましたから、見物けんぶつはいよいよ感心かんしんして、小屋こやもわ

れるほどのかつさいをあびせかけました。

それから何なにをしても、文福茶ぶんぷくちやがまが変かわつた芸当げいとうをやつて見みせるたんびに、見けんぶ

物は おおよろこ 大喜びで、

「こんなおもしろい みせもの 見世物は生まれてはじめて見た。」

とてんでんに言いあつて、またそろそろ かえ 帰つていきました。それから ぶんぶくちや 文福茶がまの ひようばん 評判は、方々にひろがつて、近所 きんじよ の人はいうまでもなく、遠国 えんこく からわざわざ

わらじがけで み 見に来る人で まいにち 毎日 まいばん 毎晩たいへんな大入りでしたから、わずかの ま 間に や 屋は おおがねも 大金持ちになりました。

そのうちに や 屋は、「こうやつて ぶんぶくちや 文福茶がまのおかげでいつまでも かね お金もうけをし

ていても さいげん 際限のないことだから、こころで やす 休ませてやりましょう。」と かんが 考えました。そ

こである まえ 日文 ぶんぶくちや 福茶がまを呼んで、

「お前を すいぶんはたら これまで随分働かせるだけ働かして、おかげでわたしも たい 大した かねも お金持ちになつ

た。人間の にんげん 欲には かぎ 限りがないといいながら、そうそう よく 欲ばるのは悪いことだから、今日 きよう

限り まえ お前を見世物に出すことはやめて、もとのとおり もりんじ 茂林寺に おさ 納めることにしよう。その

代わり か こんどは和尚 おしょう さんに たの 頼んで、ただの ちや 茶がまのように にしき いろりにかけて、火あぶりに

なんぞしないようにして、大切 たいせつ にお寺 てら の ほうもつ 宝物にして、錦 にしき の ふとん 布団にのせて、しごく あんら 安

楽 く な べいんきよ 御隠居の身分にして あ 上げるがどうだね。」

こう言いますと、文福茶がまは、

「そうですね。わたしもくたびれましたから、ここらで少し休ませてもらいましょうか。」
と言いました。

そこでくず屋は文福茶がまに、見世物でもうけたお金を半分そえて、茂林寺の和尚さんの所へ持つて行きました。

和尚さんは、

「ほい、ほい、それは奇特な。」

と言いながら、茶がまとお金を受け取りました。

文福茶がまもそれなりくたびれて寝込んででもしまったのか、それからは別段手足が生えて踊り出すというようなこともなく、このお寺の宝物になって、今日まで伝わっているそうです。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文福茶がま

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>